時の響きて　シナリオ

オープニング	短歌を流す「柔肌に　触れもせず病み　修羅燃やす　５８歳　妻も子もなく」
スクリーンに投影	「もういいかい，骨になってもまあだだよ」
ナレーション	およそ１１００体のお骨がふるさとに帰れずに今も星塚敬愛園の納骨堂に眠っています。
スクリーンに投影	１９０７年（明治４０年） 癩予防に関する件成立
ナレーション	本来の治療の目的ではなく，文明国を自負する国家の体面を繕うために，ここからハンセン病患者の隔離が始まったのである。
スクリーンに投影	１９３１年（昭和６年） 癩予防法成立 １９３５年（昭和１０年） 鹿屋の地に星塚敬愛園ができる
ナレーション	この法律の制定により，無らい県運動と銘打った官民一体による患者狩りが全国を席巻していった。挙国一致の軍国主義の下，ハンセン病患者は非国民とみなされ，職場・学校・地域で密告，強制検診，警察による強制的な引き立てや山狩りまでもがおこなわれていった。戦時中，患者たちの生活は熾烈をきわめた。
スクリーンに投影 「無らい県運動」	
語り手１	治療に来たはずなのに，多くの患者がより症状の重い人の看護・配給・清掃・そして亡くなった仲間の火葬さらに，きつい 土木や建築，農業などの作業を強いられました。 小遣いにも満たないわずかな賃金で。大人も，子どもも・・・・
語り手２	多くの人は，手足の指先の感覚がないため，けが・やけど・しもやけに気づかず化膿し悪化させました。そして，手や足，指の切断に至った人も大勢いたのです。こうして患者たちには重い後遺症だけが残されました。
語り手３	戦時中における食糧不足と強制労働による体の衰弱でたくさんの人が亡くなったのです。
ナレーション 敬愛園写真も投影	そのような時代にあって京都帝国大学の小笠原登医師は「ハンセン病は治療できる。しかし，あたかも不治の病のように誤解されている」と主張し断種・強制隔離に反対して最後まで外来治療を続けた。
スクリーンに投影	１９４５年　敗戦

スクリーンに投影

１９４６年　日本国憲法成立

ナレーション

１９５０年代になって，プロミンという特効薬が使われるようになり，病気が治り，強制隔離の全廃など，らい予防法を変えていこうという要求が起こった。それに対して当時の厚生省は，患者側の意見を無視し，しかも新憲法の理念とは相入れない方向での改正に踏み切っていくのである。それを後押ししたのが長島愛生園長光田健輔をはじめとする３人の園長による証言であった。

スクリーンに投影

園長証言１　長島愛生園：手錠をかけてでも強制的に収容すべし。（光田）

入 園 者１　俺達は囚人ではない。

園長証言２　多磨全生園：在宅患者は全て収容すべきですよ。（林）

入 園 者２　民主主義の世の中になり，自由になれると思っていたのに・・・・・。

園長証言３　菊池恵楓園：古畳を叩くように，底に沈殿した患者を汲み上げるように徹底的に収容しなければならない。（宮崎）

入 園 者３　俺たちは虫けらではない。人間なんだ。この怒りをどこにぶつければいいんだ。

入園者多数（対比させる）　デモ行進をしているところを演じる。・・・・「俺たちは囚人ではない」「予防法改定反対」「もう病気は治っているんだ」「自由をかえせ」

ナレーション

この法案に当時の社会党・共産党は反対したが，自由党・改進党は賛成の立場だった。
鹿児島県教職員組合にも支援の要請打電をしている。

スクリーンに投影

１９５３年（昭和２８年）
らい予防法制定

ナレーション

この法律には，文化的な生活の保障を軸とする９項目の付帯決議が示されている。
この付帯決議が患者たちにとって一筋の光であったが，この法律が廃止になるまでに４０年以上という長い長い年月がかかってしまったのも事実である。

スクリーンに投影

１９９６年（平成８年）
らい予防法の廃止に関する法律成立

ＢＧＭ（ピアノ）

ナレーション

法律は廃止になったが，この法律の誤りを国は何も認めようとしなかった。そして患者たちの生活は何も変わることはなかったのである。

ナレーター

２００１年5月１１日

熊本地方裁判所大法廷にて歴史的な判決が下される

幕が開く

「勝訴」・・・旗を持って弁護士が出てくる
まわりがざわめく（多くの支援者とともに喜ぶ）（拍手）

仲本　私の名前は仲本正子です。
本名を名乗れない人生なんて自分の人生じゃなかった。
私は，偽物の人間でした。でもこれでやっと人として生きられます。

支援者　仲本正子さん！！

仲本　はい。私の名前は「仲本正子です」

ナレーター　そのとき，敬愛園で判決を待っていた，原告番号１番　荒田重夫さんは
ＢＧＭ（ピアノ）　そばにいた原告や支援者と抱き合った
この瞬間６０年間使わなかった本名「田中民市」を名乗る決心をした

暗転

提訴の写真（５９番）

ナレーター　１９９８年7月３１日　熊本地裁に１３人の原告団によって第一次提訴が行われてから３年がたっていた。

島さんの映像　この提訴は，九州弁護士連合会への一通の手紙から始まった。
ナレーター　それは，長年，敬愛園で作家として「ここは憲法すら及ばない異国なのか，患者は人間ではないのか」と，小説の中で告発し続けてきた島比呂志さんからの手紙であった。

島　きっかけは，１９８８年に成立したエイズ予防法は，らい予防法の再来であると，私が指摘をしたことに始まる。その後，それに共感した，大阪薬害エイズ裁判原告第一号の赤瀬範保さんから，１通の便りをもらいました。「ハンセン病患者はなぜ怒らないのか」と・・・。その言葉は折に触

れ，私の心によみがえり消えることはありませんでした。
その後，薬害エイズの闘いが盛り上がりを見せる中，らい予防法による被害，その責任を明らかにする動きは見えませんでした。それで，私は，九州弁護士連合会へ向けて筆を執らずにはいられませんでした。
「人権にもっとも深い関係を持つはずの弁護士界は，最後まで動かないつもりなのですか」

ナレーター

この手紙を受け取った，九弁連の動きは速かった。
らい予防法を，新聞紙上で知るだけだった弁護士は星塚敬愛園へ走った。
その時，弁護士達はその「奇妙な国」の入り口に息をのんでたたずんだ。
それから３年，弁護士達は提訴準備に奔走し，最終的に１３７名の大弁護師団へとふくれあがった。
星塚敬愛園９名，菊池恵楓園４名，計１３名の原告団が立ち上がった。

上野正子さん
（証言者１）
ＢＧＭを流す

私は，１３歳の冬，発病し，沖縄から父と二人で鹿屋の敬愛園に向かいました。タクシーの乗車拒否に合い，３０ｋｍの道のりを歩き，やっと敬愛園にたどり着きました。「のどが渇いた」と訴え，コップの水を飲もうとすると，職員に「コップに口をつけてもらっては困る」と言われました。掌にコップの水を注ぎながら「ここは地獄やな。」とつぶやいた父の顔が今でも脳裏に浮かんできます。

解剖承諾書提示
↓
スクリーンへ

翌朝，目を覚ますと横に寝ていたはずの父がいません。私は声をからして泣きました。敬愛園に入って６０年になります。ここは，入所の規定はあっても，退所の規定はないのです。私はどうしても社会で暮らしたいのです。

竪山勲さん
（証言者２）
ＢＧＭを流す
ふるさとﾊﾐﾝｸﾞ

父は一人で私を育ててくれました。熱が出て，斑紋が現れ始めていた私は，１３歳の時，校長先生から，突然「もう，学校に来なくていいから，帰りなさい」と言われました。父は，県の職員に「子どもを殺していいのか！」と迫られて，私は，敬愛園に入ることになりました。早速偽名を与えられ，遺体解剖承諾書に捺印をするように求められました。「家に帰りたい」と懇願し続け，１年後，やっとのことで，帰省許可をもらえました。「日中帰ると，家の人の迷惑になるよ」という園の人に言われ，日が暮れるまで山の中で待って家に帰りました。ところが父は，「世間体があるから，もう帰って来てくれるなよ」と言ったのです。こう言わなければならなかった父の苦しみを思うと胸が詰まります。担任の先生に針の先ほどのしみを指摘され入所した人もいます。入所したことで，縁談がこわれたり，家族がバラバラになったりした人は数知れません。

玉城シゲさん

私は，人間の誇りと子孫という未来を奪われました。入所すると，逃げるのを防ぐため，持っ

（証言者３）
ＢＧＭを流す
ピアノ

ていたお金は全て取り上げられ，園内だけで通用する（ブリキのお金）を持たされました。昭和１６年，入所者と結婚して子どもができました。当時「らいを根絶やしにする。５０年間で患者を根絶する。」という考えの下では，子どもを産むことは許されませんでした。わたしは妊娠７ヶ月で堕胎させられました。髪の毛のふさふさした赤ちゃんでした。いまでも泣き声が耳からはなれません。周りの棚にはホルマリンにつけられた子どもが，２段並べられていました。そのことがあってから，私は看護婦の手伝いはいっさいやめました。その後男性の断種を結婚の条件に，４組の夫婦に対して１２畳半の部屋が用意されました。

ナレーター

原告それぞれの葛藤を乗り越えての提訴であった。しかし，園内外では，原告達に対する厳しい批判の声もあり，原告たちは針のむしろであった。

陰の声　A　○　国のお世話になっておきながらなんということだ！！
B　○　国相手に裁判をすれば園から出て行かないといけなくなるのにね！！
C　○　原告になると園での介護が後回しにされるそうだ！！
D　○　自分たちの恥をさらしてはずかしくないのかね。まったく！！
E　○　せっかく世間はハンセン病のことを忘れていたのに（間）寝た子をおこす　　なんて

ナレーター

それはまさに９０年にわたる隔離政策がもたらした，差別偏見そのものであった。

スクリーンに投影
提訴状況資料
グラフ

しかし，一方，共に歩もうと始まった支援者たちの和も広がっていった。
　ろいろな誹謗中傷はあったが，一度目覚めた人間回復への闘いののろしは消えることはなかった。
そして，裁判は熊本地裁から，東京・岡山へと広がっていった。

「太陽は輝いた」　日野弘毅(こうき)

太陽は輝いた

９０年　*長い長い暗闇の中　一筋の光が走った*

群読形式

鮮烈となって硬い巌も砕き　*光が走った*
私は，もううつむかないでいい
市民の皆さんと*光の中を*　胸を張って歩ける
もう私はうつむかないでいい
太陽は輝いた

ナレーター　「悪法は廃止さ れ，裁判にも勝訴しました。しかし，まだ多くの問題が残されています。」

ゆ　い　こんにちは・・・・ねえ，みゆき

みゆき　何？

ゆい　あそこでしょう。星塚敬愛園って。あの人たちいいよね。食べる物も住むところも保障されて，おまけに裁判に勝って，お金が入って・・・・・・・。いくらもらえるのかなあ。

みゆき　あのね　ゆい，この裁判を起こした時，いろんな人からお金めあてだって，ねたみとか中傷の声があったんだよ。

ゆ　い　え？お金めあてじゃないの？

みゆき　人の人生ってお金で買えるもんじゃないでしょ。私の知っている入園者の方は，「１円でも１億でもいい。『にんげん』ひとりの『命』の重みはお金では換えられないんだ」って力強く言い切ったんだよ。

ゆ　い　じゃあ、何のための裁判なの？

みゆき　『にんげん』の重みを踏みにじってきた国の責任をこの裁判を通してきちんと問いただしていかないと，また同じことがくり返されてしまうでしょう？

国がそんなにひどい仕打ちをしていたなんて，本当に私は何も知らなかった。家族も，学校の先生も，誰も教えてくれなかった。だって戦争が終わって民主主義の世の中になっていたんでしょう。

ゆ　い　そうなんだよ。民主主義の世の中になったのに，あのハンセン病療養所の中では，にんげんを抹殺されたままなんだ。偽りの名前の人間が収容されとったんだから。私は，初めて会う人の名前を覚えるのが好きでね。あなたは「みゆき」さんだったね。その人の名前の裏側には，その人の生き様なり『人生』そのものがつまっとるからね。わたしの本名は窪田茂久というのだけれど，「岡本洋」という偽名を名乗らないといけなかったんだよ。

窪　田

悲しい，本当に悲しい。「ひと」が「ひと」として生きていけないなんて。何も知らずにお金のことを持ち出して，本当にごめんなさい。人間の重みってその人と向き合って，はじめて心に伝わってくる。窪田さんが名前を覚えることを大事にしてきた意味がわかった気がする。

ゆ　い　ゆいさんは今，私の話を聞いて，私たちの思いを深く受け止めてくれた。本当に「知る」ってことは，無関心であった自分に気づき，わかっていきたいと思うことなんだよ。

窪　田　私は前にね、何にも知らないおじいちゃんやお母さんに，「敬愛園は危ないから行っちゃいけない」って言われて，腹が立ってくやしくて悲しくて泣きながら「どうして行っちゃいけないの」って大げんかしたんだよ。

みゆき　そうだったんだ。私、今日のことは，何も教えてくれなかった学校の先生達にも必ず伝えるから。必ず伝えるから。

ゆ　い　文明国家・近代国家の建設の美名の下に「国の恥」として強制収容され，この国から排除されていった多くの人々。国の強制隔離政策に微塵の疑いもかけず，無らい県運動として積極的に協力していった民衆。私たちの多くは１９９６年の「らい」予防法廃止をきっかけとして新聞・テレビでこの問題を知るようになってきた。差別と隔離の政策を続けた国の責任を追及し，人間の尊厳の回復をめざして立ち上がった元患者たち。その勇気に私たちは大きく力づけられた。しかし，一方これまでの私たちの無関心がハンセン病に解決を長引かせてしまったのである。まさに私たちひとり一人が加害者であった。
これからハンセン病元患者たちの思いにどのようにこたえ，これから共に歩んでいけるか。私たち一人ひとりに突きつけられた課題なのである。

ナレーター

スクリーンに投影

黒川温泉事件
ソロクト問題

フィナーレ

全員合唱

時の響きて

作詞　鶴ヶ岡裕一

作曲　山中貢

「らい」予防法が　　廃止された今
この空白の　九十余年
一体何だったのかの　思いだけが　時の響きて　こみあげる
子もなく　孫もなき　この身をば　時の響きて　奪わせる
移りゆく　季節の中で　どれだけ夢を見たでしょう
故郷の　　空を　　どれだけ飛んだでしょう

伝えよう過去を今をこれからを

[このシナリオを使用されたい方へ]

私たちは、この劇を発表するにあたり、ハンセン病問題の根幹、背景等を理解するために「敬愛園」を実際に訪れるなど数回の学習を重ねました。中途半端な知識や生半可な気持ちで演じてはいけないと考えたからです。

もし、文化祭等でこのシナリオを使いたいとお考えの方がいらしゃいましたら、事前に鹿教組肝属支部（0994-43-2212）の伊集院までご連絡ください。ご協力させていただきます。